

Title	南方土俗(臺北帝大土俗人種學研究室内南方土俗學會發行)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1931
Jtitle	史学 Vol.10, No.3 (1931. 9) ,p.201(543)- 202(544)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19310900-0202

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の民族の全部の批判は出来ない。アイヌの叙事詩にも幾段の變遷がありしなるべく吾人は、その中でも古式を帯びたカムイ・ユーカラがアイヌ生活の研究に多くの資料を提供することを信じて疑はない。

著者は、本書の序言の中にその研究法について一言せられ、文化科學は、具體的個別的なものであり、統計的方法は役にたゞずと述べてをられるが、吾人は、此問題に關する全ての資料を比較し、綜合し、歸納し、統計的方法をもつて結論を得たい希望に堪へぬ。著者は非常な學術的良心をもつて一つ一つ正確な資料の提供を志してをられるのであらうと思はれるが、しかし、發表せられざる部分も、大體そのアウト・ラインを示され、その主題などの共通・特種等の區別を統計的方法で示していたゞくことは出来ぬだらうか。著者自身ユーカラの構想を論じ共通形式と異體とかいふ區別を述べられてゐるが、これは暗黙の中に氏自身が統計的方法をとつてゐられるのではなからうか。吾人は、この區別を數的證據を擧げて説明され、讀者を納得せしめらるる様な態度をすることだけはして文化科學の眞性質に違背するものではなく、却て科學としての正確さを増すのではないかと思ふ。然らざれば吾人は、提供された資料から學問的歸結を惹くことが容易でなくなる。叙事詩の研究にも或程度まで統計的方法の採用は必要なのではあるまいか。後進者として甚だ非禮僭越ではあるが著者の寛容を信じ、評者の希望を述べて蕪雜な紹介の筆を置く（松本信廣）。

高橋氏文考注

（大岡山書店發行）

記紀のごとき統一ある國史の編纂される以前には、家氏には、それぞれその由來や事蹟をのべたところの、纂記とか本系帳とか氏文とか稱せらるるものがあり、さうしてそれらがまた國史編纂の貴重な資料の一となつたであらう。その中氏文の例としては、本朝月令、政事要略、及び年中行事秘抄などに散見せる高橋氏文があり、その注釋本としては、伴信友の考注一卷が有名である。本書はこの伴氏の考注の復刻であつて、横山重・松澤智里兩氏によつて嚴密なる校訂を施されて新に公刊されたことは、古代文學及び古代史の研究者にとつて誠によることばしい次第であつて、この氏文が古代研究に對し極めて貴重であることは、他の書においては甚だ稀れなる古い宣命を傳へてゐることだけをみてもわかる。たゞ慾をいふならば、この氏文の由來とか性質とか、價值とかについての解説を附してもらへば、初學者にとつて一層便利であつたらうと思ふ。（松本芳夫）

南方土俗

（臺北帝大土俗人類學研究室內）
（南方土俗學會發行）

臺北大學の教授その他の盡力でこゝにいふ標題の雜誌が、發行された。移川子之藏氏のその蘊蓄を語る「紅頭嶼ヤミ族と南方に列なる比律賓バタンの島々。口碑傳承と事實」は、その第一號を飾る好論文である。まづヤミ族の口碑を述べ、バタンより渡來したりといふ云ひ傳へあることを述べ、日本の漂流記事、航海記によつてバタン島の土俗について語り、ヤミと同じきことを指摘し、つ

いで語彙の近似せるを示し兩者が比較的近世に分離せることを論じてをる。最後にヤミ及びヒリッピンの北部、臺灣のプヌマ族が部落名にI又はY音を接頭にすることに注意し、北に位ひする邪久又は夷邪久の鳥々の古名もI又はYの接頭語を持てるものであり、その類型ではないかと疑ひ、支那人の云ふ東夷の夷も同一事象に起因したものであるか研究の要があること述べてをる。

巻頭を飾る論文は幣原博士の「卑南大王」で臺灣卑南族の歴史を語つてをる。氏は三頁に檳榔はピナンの音譯に過ぎぬといつてをられるが、檳榔の音はピンランであり、間に品の存在を示しピナに比定することはすぐにはどうかと思はれる。その外、桑田六郎氏の「世次を示す名字に就て」山本由松氏の「臺灣蘇鐵の分布とパイワン族」早坂一郎氏の「ティモール島の瞥見」を初め、安部明義氏の「卑南社猿祭」宮本延人氏の「花蓮港花岡山の遺跡」移川氏の「ルカイ族の信仰の一節」、馬淵東一氏の「サナサイと加禮宛」等の有益な記事が満載されてをる。初めての事とて誤植多き點など遺憾な點もあるが將來の改善を期し、その多幸なる前途を祝福してこの紹介の事をさしめる。第一號本年三月十五日發行。第二號は七月中に發行され、「南支那蠻族の文化」前島信次、「埔里の熟蕃聚落」移川子之藏、「福州の一瞥」久保天隨等の記文を満載してをる。年四回一箇年二圓八十錢發行所臺北市榮町一ノ二〇新高堂書店 振替臺灣二番。(松本信廣)

本書は著者が東西民族の沐浴に關する文献を涉獵し、繪畫を蒐集し、以て我が國民の沐浴風習を調べ、更に外國に移り彼我の比較を試みられたものである。

沐浴には、風呂、行水、瀑布浴、冷水浴、温泉、水泳等の如き種々の方法があるが、印度人の入浴、回教徒の水洗、耶蘇教徒の洗禮は、明かに水にて清める信仰であるが、我が國民の如く、水を以て淨め得るこの信仰の強い國民は又と世界にあるまいと云ふ事である。

歐洲古代文化の中心となつた希臘羅馬に於ては沐浴が大に行はれ、其の風習は前者より後者に、後者より更に中歐地方に傳播され、就中羅馬に於ては沐浴黄金時代を産み、これが文明に貢獻した事多く、有名なカラカラ浴室は其の遺蹟を今日に傳え、觀者をして三千年前の羅馬の盛時を直感せしめるものの一である。爾後沐浴は讃禮され、十四五世紀に至りては、これに伴ふ風紀上の弊害極まりなく、眞に人を覺醒せしむることが多かつた反動として、十七世紀に至りては世人から顧みられなくなり、浴場を口にするだに品格を具ふる者は之を耻とするまでに至つた。然るに十九世紀に入りて漸次再興の機運に向ひ國民保健上から浴場の設置を見て今日に至つたものである。

我が國民の沐浴は古く禊の思想の影響はあるにせよ、殊に入湯は佛教の教化に據るもので、寺院に於ける浴室の設置と洗浴とは其起源古く、沐浴感化に多大の力あつて、今日に於ても猶ほ大寺古寺に其の遺蹟を又遺風を傳へて居るものもある。因にこれ等寺院浴室は蒸風呂が多數で、湯槽のものは少數である。この寺院の

東西沐浴史

(藤浪剛一著
人文書院發行)